

孫子のかくれんぼ

——『孫子』は兵法書ではない——

一 はじめに

日本最古の兵法書『鬪戦経』で、『孫子』を日本の武士道精神に反し合わないとし、「卑怯」と評価している。ここで「本當に『孫子』は卑怯なのだろうか？」という一点目の疑問が湧いた。孫子は周開から「卑怯」と言われることを予測していたのではと考えた。それでもなお「孫子」を出したのは何故か。二点目に、「孫子」は何かを伝えるために書いたのでは？」という疑問が湧いた。本論ではこの二つの疑問を大きな軸として『孫子』を論じていく。

二 『孫子』の「戦い」とは？

(一) 何故人は戦うのか——人は戦いに行く——

何故人は戦うのか。実は人間にとって「戦い」は不可避なものではないのだろうか。まずはその原因を考えていく。

戦いが起きるには二つある。一つ目は、二人以上の者が同じ方向の目的・目標に向かって衝突し合う時。二つ目は、巻き込まれて戦わざるを得ない状況になることにある。

まず一つ目について考えたい。それぞれ違う方向を向くことでは

石 神 さゆみ

解決できない。何故かと言うと、人は目的や目標を達成するために必死になるからだ。この考えにいきついたのは『ぼのぼの』という映画による。作中、ヒグマの大将が他の土地から来たスナドリネコに「目的や目標を持つてはいけない」と言う。

ヒグマの大将「俺はな、命を懸けるくらいなら負けてやるぜよ。
／＼てめえの傷はもう少しばかり上だったら死んで
いるところだぜ」

スナドリネコ「ああ、知ってるよ。お前がわざと少し下に外したの」

ヒグマの大将「なら、なぜやめねえ。死にてえのか／＼おめえは
何かに命を懸けることで、物事を解決できると
思っている野郎だぜ。俺はなあ、そういう野郎は
絶対許しちゃあ、おかんのよ。」

スナドリネコ「何故、命を懸けたりしてはいけないんだ？」
ヒグマの大将「生き物はな、生きていることがすべてよ。／＼そ
れを誰かが、何かの目的に命を懸け始めたらどう
なる!?／＼おめえは何故！命なんか懸ける!？」

スナドリネコ「俺は命を懸けたりなんかしていないよ。お前さんより、我慢するのが得意じゃないだろう」

ヒグマの大将「嘘をつけい！てめえは何か目的がないと、生きていけねえ馬鹿野郎だよ！目的のために生きている奴はなあ、嫌でも我慢強くなるもんさ。そういう奴がこの森に一匹でも現れたら、他の生き物はどう足掻いても、そいつには勝てねえよ。何故なら、そいつは死ぬまで「参った」とは言わねえんだからなあ。その先はどうなる？この森にいるやつらはみんな、自分と、自分の家族を守るために、おめえと同じ様に命を懸け始めるようになるんだ。それがどんな世界の始まりか、おめえにはわかるか？」

（映画『ぼのぼの』原作／監督いがらしみきお）

大将の問いに答えるならば、「戦いの世界が始まる」だろう。仮にただ生きるだけなら自分の命だけを大切に、人間の世界は今ほど戦いが起きていなかっただろう。

では何故、戦うのか。それは当たり前のように「生きること」さえも、目標や目的のための手段になっているからだ。生きるためには食物が必要で、食物を得るにはお金が必要である。そのお金を得るには稼がなければならず、職を得るか法を犯さなければならぬ。それらは本来、生きるための手段である。

しかし人が目標や目的を持つことで、ただ生きているだけでなく、より良く生きようとなった。今より良い地位を得、強い力を持ち、

何かの頂点に立とうとする。今で言う「生きる」は単なる生命維持ではなく、「よりよく生きる」ことである。

目的や目標が、一人の者にしか得られなければ、人は他人と競争し、蹴落とす・蹴落とされる戦いを繰り返す。例えば、受験、就職活動、地位争いがそれにあたる。現代の日本では、武器は取らないが、「よりよく生きるための」戦いが起きている。

（二）何故人は戦うのか——人は戦いに巻き込まれる——

一節から、命を懸けることに必死にならなければ良いのではという疑問が湧くが、そうはいかない。ここでは、一節に挙げた二つ目について考えていく。

スナドリネコとヒグマの大将が対峙した日に生まれた、大将の息子・子ヒグマの坊と妻を残し、大将は家を出た。

坊が大きくなった時、ジャコウウシが通る日がやってきた。森に住む動物たちはそのウシが通る姿を一目見ようと、木や草陰から隠れて見ていた。そこにはヒグマの母息子もいた。ウシがやってくると皆、その大きさに息を飲んだ。子ヒグマの母は息子の坊がいないことに気づく。坊はウシの真似をして、地面を這っていた。坊がウシに踏みつぶされそうになった時に、家を出ていたヒグマの大将が現れた。大将であろうと、この大きなウシに適う相手ではなく、彼もまた踏みつぶされてしまう。それでも、大将はウシの前に立ちはだかった。しかし大将は寸前のところで、避けた。ウシは避けずに通った。坊は踏まれずに、奇跡的に助かった。

（映画『ぼのぼの』いがらしみきお）

命を懸けないことに頑なだった大將が、何故命を懸けたのか。それは彼にとって、命に代えてでも自分の息子・坊を守りたかったからだ。「坊を守る」とは彼にとって目的・目標であり、達成する為に命を懸けた。また何故避けたのかと言うと、自分の命が危ないからだ。

大將の言動から生き物には、自分を守るための心、何かを守るための心があるのがわかる。守るのはどちらかだけでも良いだろう。しかし、自分を守るために生きていけば、もう一つの心は苦しく、何かを守るために生きていけば、自分が辛くなる。片方だけで貫き通して生きていくのは難しく、出来ても辛い世の中になるだろう。

二つの心がある理由は、自分の命以外にも、何らかの存在があるからだ。自分の命を守ることに徹していた大將の考えが変わったのは、坊が生まれたからだ。もしウシの前に飛び出したのが坊でなかったら、彼は自分の命を守るために、飛び出さなかっただろう。つまり戦いは、自分の命を守るか、他の誰か・何かを守るかを迷った時に、巻き込まれる形で既に起きているのである。

一節からは自ら戦いに行き、二節からは戦いに巻き込まれる、という結論に至った。このことから、戦いは不可避で、無くなることはないとわかる。

しかし、本当に戦いや戦争に対し、その戦いは本当に有益か、どれくらいの損害や影響が出るのかを、わたしたちは本当に正しく理解しているだろうか。

(三) 戦いと経済

戦いには、何が必要で、どんな利益・損害が出るのか。『孫子』の作戦篇では次の様にある。

● 『孫子』作戦篇第二

孫子曰、凡用兵之法、馳車千駟、革車千乘、帶甲十萬、千里饋糧、則内外之費、賓客之用、膠漆之材、車甲之奉、日費千金、然後十萬之師舉矣、(傍線、傍点筆者)

原則、戦車千台、輜重車千台、武器をつけた兵士十万ほどが必要であり、千里より離れたところが戦場ならばそれ以上に費用がかかる。

また、国と戦場までの距離によっても、経済的負担は変わる。

● 『孫子』作戦篇第二

國之貧於師者、遠輸、遠輸則百姓貧、近於師者貴賣、貴賣則百姓財竭、財竭則急於丘役、力屈財殫、中原内虚於家、百姓之費、十去其七、……傍線、傍点筆者)

戦争は、距離に関わらず費用がかかる。遠い所で戦争を行えば、その分必要な食糧を運ぶ必要があり、人民の負担が重くなる。また近い所で戦争を行えば、その中での商売は危険な為、物価が高くなる。それでも民衆は生活必需品を買わなければならないため、生活が圧迫される。そして民衆から兵を出すことが難しくなり、戦力も乏しくなる。

また、費用がかかるのは戦争時だけでなく、敵情を把握する為のスパイにもかかる。

●『孫子』用間篇第十三

相守數年、以爭一日之勝、而愛爵祿百金、不知敵之情者、不仁之至也（傍線、傍点筆者）

戦いは、戦う前に敵の内情を知ることから始まる。敵情を基に、勝つ為に作戦を練るため、内情を知るとは戦いの要である。そのため間諜が必要であるが、爵祿百金を与えなければならぬ。これを惜しむと、敵の正しい状況を得られず、敵の出方を知らずに戦うので、敗北で終わるか、やらなくて良い戦争を起こすことになる。作戦篇から、国の財政は危うくなり多くの国民も犠牲になり、国が減ぶことが読み取れる。それを避ける為、間諜に関する出費・時間が必要なのだ。

つまり戦いとは、犠牲は不可避で、それを少なくするためにも、経済的負担がかかってしまうものであり、国民の生活・命と国の経済と大きく関わる。安易に戦争を起こしたり長引かせたりしないためにも、間諜を遣う費用が必要なのである。

戦争と経済は切れぬ関係だ。戦争には多くのものが必要で、それ以上に失う可能性がある。戦いの規模が大きくなるほど、犠牲の規模も、必要な物の数も質も大きくなる。

（四）孫子の戦いへの考え

戦いに対して『孫子』は出来るだけ戦いを避け、戦う場合でも短

期間で勝って終わらせようとしている。戦いの在り方に関して、作戦篇ではこう述べている。

●『孫子』作戰篇第二

故兵貴勝、不貴久、故知兵之將、生民之司命、國家安危之主也、（傍線筆者）

戦いが長引いてはいけない理由は三節にある様に、長引くほど犠牲と費用がかかってしまうからだ。そうなると、国家の存続は危うく、勝利は無意味だ。その危機を少しでも減らすために戦争は短い期間で終わらすべきなのである。

謀攻篇では次のようにある。

●『孫子』謀攻篇第三

孫子曰、凡用兵之法、全國爲上、破國次之、全軍爲上、破軍次之、全旅爲上、破旅次之、全卒爲上、破卒次之、全伍爲上、破伍次之、是故百戰百勝、非善之善者也、不戰而屈人之兵、善之善者也、（傍線筆者）

長引く戦争はよくない作戦篇に対し、謀攻篇では、戦わずに敵の軍隊を屈服させることがよいとある。『孫子』は、不可避な戦いによる犠牲や費用を、最小限にするために書かれたものではないか。

以上のことをまとめると、戦いに対しての『孫子』の位置づけは、「戦うことはなにか」「善い戦い方とはなにか」を教えてくれる書物だと言える。

三 『孫子』は卑怯か

(一) 『孫子』は卑怯か—『鬪戰経』の批判を通して—

現代の日本は『孫子』を受け入れ、特にビジネス書、啓発書として読むことが多い。しかし、嘗て日本では『孫子』を読むべきでないとしていた時代があった。

日本の戦国時代は、／「兵は詭道なり」として権謀術数を奨励する孫子の理論が全ての面で横行した。まさに我が国が孫子の影響を最も強烈に受けた時代であり、それは、戦術・戦法・ベルや軍事戦略レベルを超えて大戦的レベルまで「詭」の思想に完全に支配されていた／特に、『孫子』を強烈に体現した竹田信玄や毛利元就らは、似ても焼いても食えない「一寸の隙のない人間」であったといわれている。

このように、『孫子』に心酔し過ぎると、赤心を対者の腹中に置くことができず、親子以外には心を許すことのない、「和」を尊ぶ日本人の陶酔からはかなり異形の人間になることから、古来日本では、「孫子読むべし、読まるるべからず」と言われてきたのである。(『鬪戰経 武士道精神の原点を読み解く』家村和幸 P. 3)

何故『孫子』は読むべきではないとされたのか。日本の最古の兵法書『鬪戰経』を使って考えていく。家村氏によると『鬪戰経』は次のように成り立ったとされる。

当時の日本で「孫子」その他の兵書に最も精通していた匡房は、「兵は詭道なり」とするシナ兵書が和の精神を基調とする日本の国柄に合致せず、やがてはこれらの兵書を生み出した古代シナの春秋戦国時代の様な群雄割拠、戦乱の巷をもたらしかねないことを危惧し、「孫子」を武家に伝授するにあたり、日本人の為の兵書『鬪戰経』を書いたとされる。このことは、鬪戰経を入れた函に金文字で書かれた次の文面からも明らかである。右『鬪戰経一部』は日本無双の書なり。／七書の内、兵術の骨髓は「孫子」なり。漢朝千歳の手本となるは「孫子」なり。而してこの『鬪戰経』は「孫子」と表裏す。「孫子」は詭道を説くも、『鬪戰経』は真鋭を説く、これ日本の国風なり。これと和軍の道筋は格別に立つを知るべきなり。(『鬪戰経 武士道精神の原点を読み解く』家村和幸 P. 15～P. 16)

その『鬪戰経』には『孫子』に関していくつか述べていることがある。例えば、次のように『鬪戰経』と『孫子』を比べ日本の教えが良いとされる。

●『鬪戰経』第八章 詭譎と真鋭
漢文有詭譎。倭教説真鋭。詭哉詭。鋭哉鋭。……(傍点筆者)

「漢文有詭譎」は、『孫子』の「詭道」を指している。これまでにあげた『鬪戰経』の成立を見ていくと、「詭道」を「全て相手を偽り欺くのがよい」と解釈している。

それだけで『孫子』を卑怯だと評し、「読まるるべからず」とで

きるだろうか。まずは「詭道」のどのようなところが具体的にいけないのかを考えて行く為、笹森氏の解釈を参考にしていく。

孫子は、「兵は詭道なり」と言っている、魏武注に「兵に常形なし詭詐を以て道となす」とある。詭とは、いつわり、あやし、たがうの義である。彼らは表裏をかけ、いつわって勝つことを軍の本領としている。／しかるに本章においてはこれに反し、詭譎に非ず、真鋭なり、と直截明快に説くのである。孫子の陰險なる闇夜にだまし討ちをかけるようなものではなく、日本の武は白昼堂々、明晃々と、破邪顕正の実をたちどころにあげるのである。／「詭なるかな詭や」とは、いつわって勝つというのはいつわりである、という意である。また兵道はあざむく事であるというのは、あざむいた事である。／「鋭なるかな鋭や」というのは、鋭の鋭なる事を賞美することである。（傍点・傍線筆者、『純日本の聖典 闘戦経』笹森順造 P. 50～P. 51）

『闘戦経』が『孫子』を嫌うのは、魏武注の「詭詐を以て道となす」という解釈の「詭道」である。「詭詐」を道德的な意味で「詭道」を解釈していなければ、傍線部分に相当する次に挙げる『孫子』の計篇を陰湿なやり方と評価しなかっただろう。

● 『孫子』計篇第一

兵者詭道也、故能而示之不能、用而示之不用、近而示之遠、遠而示之近、利而誘之、亂而取之、實而備之、強而避之、怒而撓

之、卑而驕之、佚而勞之、親而離之、攻其無備、出其不意、此兵家之勢、不可先傳也、

道德的な意味で「詭詐」と解釈した「詭道」で読むと、確かに陰険に見える。しかし、いくつか反論をしたい。一点目は、『孫子』を理解していないという点だ。このことは二点目以降から論ずる。二点目は、魏武注「兵に常形なし詭詐を以て道となす」の意味の解釈が誤っている点である。

詭詐の「詭」は「詭道」からきており、次の様な意味を持つ。

敵に勝つためには、まっとうなやりかた（正道）だけではだめなので、敵を欺かなければならないということであろう。ただし、ここに述べられているところを見ると、単に相手をだます、たぶらかすというようなことではない。実際と違う様に見える。せかけて相手に実態を悟らせぬようにし、相手の十強を誤らせるとか、相手の裏をかき意表をつくとか、相手のペースを乱してこちらのペースに巻き込むとかいうことが全部含まれる。そのようなさまざまな工夫をして敵の弱点を作りだし、その弱点をつくことが、詭道という語で表されているとみられる。／現実におかれた敵味方の実態に対して「詭」によって条件を作り替える権（臨機応変の対応策）を説いているのであって、そういう状況の作り替え、転換があるから、「兵家の勝つは、先づ伝ふ可からず」ということになるのである。（『全釈漢文大系第二十二巻孫子・呉子』山井勇 P. 52～P. 53）

つまり、詭詐、詭道の「詭」とは「臨機応変にしていくな」意味なのである。次に「詐」を見ていきたい。「詐」とは、次に挙げる軍曹篇の「詐」に当たる。

●『孫子』軍曹篇第七

故兵以詐立、以利動、以分合爲變者也、

詭にはいつわる、だますという意味があるが、それは道德的な意味のものではなく、千変万化して相手に手の内を見透かされないようにして相手を制する術である。兵法は利にもついで自在に変化し、それによって敵の不備を攻め、不意を襲って勝を制するものであるから、「詭道」でなければならぬ。だから軍争篇にも、「兵は詐をもつて立ち、利をもつて動く」とある。詭道とはどういうものか。孫子は十二の例を挙げて説明しているが、それは要するに、「その備えなきを攻め、その不意に出ず」ためのものであった。このような詭道は秘伝であることはいうまでもない。

五事七計は兵法の常法、すなわち兵の正。「勢とは利に因りて権を制する」以下は、兵の変化、すなわち兵の奇を述べたものといえることができる。（『孫子新解』岡田武彦 P.55）

詭詐の「詐」とは「詭」と同じく、「臨機応変に変化していく」ことを意味している。つまり「詭道」、「兵に常形なし詭詐を以て道となす」というのは、単に相手を騙すことをではなく、次の様に解釈すべきである。「戦いというのは、その時その時に合わせて戦わ

なければならぬ。戦いは臨機応変に対応することが本質だ。だから『孫子』の計篇「兵は詭道なり」から始まる文の終わりに「此れ兵家の勢、先に伝うべからざるなり」となっているのである。また佐藤氏は、荻生徂徠の「兵者詭道也。」の注釈に対して次のように理解している。

よのつね詭道と云へば、いつはりと言訓ばかりに泥みて、合戦と云へば、とかく表裡ばかりを、軍の本意と定むるは癖事なり、あやしとは敵よりあやしみ、何とも合点のゆかぬこととなり、たがふとよむ時は、詩経の詭随、孟子の詭遇などの、詭の字の意にて、正しき定格を守らぬことなり。故に兵は詭道なりと云は、軍の道は、とかく手前を敵にはかり知られず、見すかされぬ様にして、千変万化定まりたることのなきを、軍の道とするなり。（『孫子国字解』）

詭道を単なる詭詐とみることなく、これを「正しき定格を守らぬこと」「千変万化定まらぬところのなき」ものとした徂徠の見方は、はなはだ適切であつて、定格を否定し活格を肯定した長沼濤斎のそれと比較される。徂徠は「能而示之不能。」以下の詭道十四変を解説したのち、最後の二変「攻其無備。出其不意。」といふ注釈をあたへてから、この見方を『孫子』の「此兵家之勝。不可先伝也。」（始計篇）の解釈の上に及ぼし、次のやうに記してゐる。

兵はもと詭道なるよりにて、其仕形一定することなし。／畢竟は敵の備なき油断の処をせめて、敵の思ひがけぬ処より計を

出してこれを挫くこと、是兵家の勝つ妙術なれども、皆軍に臨んで変に應ずる上のことなれば、今出陣の前戦はぬ先に、云ひ述べべきに非ず。それゆへに軍に先だちて勝負を知るは、五事七計を以て定むることなりと云意なり。この本文の伝授の意に見る説もあり、これにても通ずるなり。（『孫子国字解』）

「先伝」二字の解釈が鍵である。／＼詭道の奇は千変万化するから、これを先伝することができないといふ意味にほかならない。「教正而不教奇。」と同巧異曲である。（『孫子の思想的研究』佐藤堅司 P. 313～P. 314）

このことから、「詭道」は正しい定格のない、臨機応変に変化していくものと理解すべきだということがわかる。つまり、『孫子』は卑怯ではない。

冒頭に上げた二点目の反論をしていく。「中国の書物によると、全て相手を偽り欺くのがよいとしてある」「いつわって勝つことを軍の本領としている」というのは大きな間違いで、「詭道」だけに注目したせいだが、『孫子』を理解していれば、「相手を非道徳的に騙すことが軍の本領だ」という解釈はない。何故なら、『孫子』の戦いの本質は「戦わずに勝つ」ことが全てだからだ。

仮に相手を偽り騙し勝とうとしたなら次の様なことが危惧される。まず相手国の場合を考えると、相手国の勝敗に関わらず、自国へ報復をする恐れがある。「不戦而屈人之兵、善之善者也」を上策としているのだから再戦は望んでいなく、「故兵貴勝、不貴久」と作戦篇にあるのなら、長引く戦いも望んでいない。

次に自国の軍を考えると、兵士たちがついてこなくなる。『孫子』の計篇にある様に上下の心は合わなければならなく、地形篇でも、将は率いる兵士が死地に行くことも躊躇わない存在でなければならぬ。もし相手を偽り騙し勝とうとする将だったら、兵士たちは心からついていかないだろう。

これらの恐れは、最終的に自国のためにならず、『孫子』はそのことを一番望んでいない。だから「中国の書物によると、全て相手を偽り欺くのがよいとしている」というのは大きな間違いである。

詭道の解釈は安易な物ではない。佐藤氏によると、「素行自身にしても、詭道に対する意見をもつまでには、相当に苦勞の年代をかさねたのである」（『孫子の思想的研究』佐藤堅司 P. 64）。笹森氏は『闢戰経』を「原文は漢文を使用して居るが、中国伝来の書ではなく、中国思想の感化を受けていない、全く本邦に発祥した純日本文献である」（『純日本の聖典 闢戰経』笹森順造 P. 3）とある。これまでのことから、『闢戰経』は確かに中国思想の感化は受けていないが、「詭道」への解釈にやや振り回されていたのではないだろうか。

四 『孫子』は兵法書ではない

（一）人を想う『孫子』

何故『孫子』は「戦わずに勝つ」ことにこだわったのか。第二章から考えると、国家を疲弊させないためにとれるが、それ以外にも守りたいものがあつたからではないか。戦い方以外をも感じさせる『孫子』の魅力とは、なんだろうか。

『孫子』は現実的な戦い方以外にも、時折人に寄り添ったことを

述べている。

その一つ目は、次に挙げる『孫子』の計篇にある「道」だ。

●『孫子』計篇第一

孫子曰、兵者國之大事、死生之地、存亡之道、不可不察也、故經之以五事、校之以計、而索其情、一曰道、二曰天、三曰地、四曰將、五曰法、道者令民與上同意也、故可以與之死、可以與之生、而不畏危、……（傍線筆者）

『孫子』は五事の第一に「道」を挙げ、その意を上下の人の心を合わせるとする。人の心が合わなければ、勝利は得られない。佐藤氏は「道」について次のように述べている。

「道者令民与上同意也。／可与之死。可与之生。而不畏危也。道は上下一心、君民一体のよりどころとなるべき徳、すなはち仁愛の特に該当する。さうして、それは荀子のいふ「士民不親附。則湯武不能以必勝也。故善附民者。是乃善用兵也。故兵要在乎善附民而已。」と符節をあはせてゐる。君の仁愛が下の士民に徹底すれば、士民の側でも、その父に考をつくうすやうに、君に忠誠をはげみ、君と生死を与にし、身命の危険を畏れないやうになる。この道は、將兵の關係に適用されて、地形篇においては、「視卒如嬰兒、故可與之赴深谿、視卒如愛子、故可與之俱死。」と敘術されてゐる。

要するに、孫子のいふ道は、上下親和の道、君民融和の道にほかならないのであつて、孟子の人和と共通する。孟子は「天

時不如地利。地利不如人和。」といつてゐるが、孫子もこれとおなじやうに、人和を天時や地利以上に尊重して、道に最高地位をあたへたのである。（『孫子の思想史的研究』佐藤堅司 P. 54）

戦いには共に戦う人が必要の為、「人和」は最も重要である。また『孫子諺義』で山鹿素行は「道ハ人民ノタメノ道也、人民ヲノケテ別ニ道ナシ、我道ニカナヘリト思フトモ、衆心我ニ背ク時ハ、道ニアラザル也」と言う。それ程に『孫子』は人を大切にしていた。

二つ目は、孫子「謀攻篇」に出てくる「全國爲上」の「全」に特に注目したい。ここで言う「全」とは動詞の役割を持っており、「まっとうする。欠けることなく保つ」という意味である。山井氏は、「戦争をすれば、多少とも相手の国に損害を与えるので（当然、こちらの国にとつても損害が生ずる）、「国を全うする」ことにならない。」（『全釈漢文大系第二十二卷孫子・呉子』山井勇P. 66）と、述べる。また、『孫子』の作戦篇で「卒善而養之（敵の捕虜を大切に養う）」とある。山井氏は「味方の戦力として役立てようという趣旨であろう」（『全釈漢文大系第二十二卷孫子・呉子』山井勇P. 64）と解釈する。戦いとして考えれば敵は倒すべきだが、味方にすることで自国が傷つく可能性は低くなり、戦力となるので一石二鳥である。しかし、「全國爲上」も、「卒善而養之」も、相手の兵や人民をも自国の人民の様に扱っている様に思える。佐藤氏は「全國爲上」に関して次のように論じる。

孫子は主戦論者ではなく、平和論者であつた。／「兵者不祥

之器。非君子之器。不得已而用之。」といった労使に共通してゐる。

戦争か平和か、二者択一の立場にたたされた時、『孫子』が平和を選んだのは、言ふまでもないことであつて、真にやむをえない場合にのみ戦争を肯定したのである。従つて万全主義が、『孫子』の戦争論の重要素となつたのは当然／さうして、それとおなじ考が、本謀攻篇に繋がつてゐる。われわれはまづ本編の起語、

用兵之法、全國爲上、破國次之、全軍爲上、破軍次之、全旅爲上、破旅次之、全卒爲上、破卒次之、全伍爲上、破伍次之を検討してみ必要がある。／孫子の全軍論においては、敵側のそれらを全うするのが第一案であつて、敵側のそれらを破るのは第二案である。／孫子は用間篇に示してゐるやうな仁の精神をこの謀攻篇のうちにも十分に示してゐる。孫子には敵をただ仇敵として憎む気持がなかつた。さきにも挙げたやうに、孫子が敵國・敵軍を全うするといつたのは、敵をも愛する精神をもつていたためである。／孫子が謀攻篇の冒頭全国論において、敵國・敵軍を破ることなく、これを全うすることを第一義としたのは、その戦争論が、平和と仁愛にみたされてゐた証拠／

〔孫子の思想史的研究〕佐藤堅司 P. 81～P. 84)

佐藤氏の意見に全くの同意である。何故ならば敵を憎もうと思へば、いくらでも憎むことができ、それに伴つた戦い方を孫子ならば用間篇の「凡軍之所欲撃、城之所欲攻、人之所欲殺、必先知其守將左右謁者門者舍人之姓名、令吾間必索知之」の様に、多く考え付い

たであらう。

また、同じく用間篇「愛爵祿百金、不知敵之情者、不仁之至也、非人之將也、非主之佐也、非勝之主也」で「不仁」を働く事に対し孫子は批判している。その理由は、間諜は勝利の要であり、それを怠ると戦いを避けられず、最悪の場合負けからだ。

「仁」とは勝利、国に、さらに国民に向けられてゐる。この様に考えたのは、「道」、「全國爲上」、「卒善而養之」、「仁」、「孫子」の全てが、人に向けられてゐると思えるからだ。勝利した後の結果を考えると、戦いながらも国を守るだけでなく、相手国と自国の人を救つてゐる。孫子が「戦わずに勝つ」ことにこだわつたのは、人を救うためではないだろうか。「戦わずに勝つ」以上に「人」に優しい戦い方は、聞いたことが無い。

(二) 孫子、見つけ

筆者は『闘戦経』の様に『孫子』を卑怯と感ずることもあつた。しかし憎み切れず、それ以上に『孫子』の何かの一貫性に強い魅力を感じた。その一貫するものの、『孫子』が書かれた糸を疑問に感じた。しかし孫子の姿がはっきり見えなく、遠い存在に感じられた。

筆者がそう感じた理由は「孫子は最高峰の兵法書である」という評価と、先人観にある。この評価と先人観は『孫子』の理解に不要だ。これまでの研究から、『孫子』は単なる戦いに勝つために読む兵法書ではなく、「戦いを知る」ための書物ではないだろうか。

『孫子』の戦い方は、現実主義的である。規模の大小に関わらず、どんな戦いでも通用出来る。そのために昔から現在まで伝わっているのだらう。

しかし中には、非現実主義的なものもある。代表的なのは「不戦而屈人之兵、善之善者也（戦わずに敵兵を屈服させて、勝つことが最高に優れている）」。普通に考えれば、戦わなければ勝敗は出ない。しかし孫子は、敵国を傷つけることなく戦わずに勝つことを、最善とした。プロイセン王国の軍人カール・フォン・クラウゼヴィッツは著書の『戦争論』で、戦争という物理的暴力の中で博愛主義を取り入れるのは不合理だとしている。

彼の言う様に、『孫子』が勝利の戦法方以外にも書かれているのは何故か。それは孫子が誰よりも人を想い、平和を望んでいたからではないだろうか。

「不戦而屈人之兵、善之善者也」は孫子の一番の願いだと感じられる。そう思うと、『孫子』は兵法書ではない。『孫子』は『孫子』なのである。『孫子』を、全ての先人観と評価を取り払って『孫子』として読むことは非常に難しいだろう。『闕戦経』の「詭道」の解釈からは、「日本化した『孫子』」と言える。それほど『孫子』を正しく理解するのは、とても難しいことなのだ。それでもあらゆる先人観を捨てるべきであり、先人観や他者の評価で、孫子を隠してはならない。

これから私たちは、『孫子』を「戦いに勝つ」ために兵法書として読むことよりも、「戦いとはどういうものかを知る」ために『孫子』として読んでいくことが必要なのではないだろうか。見つけた孫子と仲良くしていくのは、これからだ。

参考文献と参考にしたもの

古川黄一『孫子諺義』

民友社

一九二二年九月十六日

早稲田大学編輯部『漢籍国字解全書…先哲遺著十卷』（現在『孫子国字解』はこの書物に収録されている）

早稲田大学出版部

大木陽堂 解説『闕戦経』 教材社

佐藤堅司『孫子の思想的探究』

株式会社風間書房

山井勇『全釈漢文大系第二十二巻孫子・呉子』

株式会社集英社

岡田武彦『中国思想における理想と現実』

図書出版木耳社

森本哲朗『戦争と人間』

株式会社文藝春秋

常石茂『孫子を読む』

株式会社勁草書房

立間祥介『中国の人と思想孫子③戦わずして勝つ』

株式会社集英社

笹森順造『闕戦経 釈義』

日本出版放送企画

小林武松『孫子』

敝燈社

諸橋轍次『乱世に生きる中国人の知恵』

講談社学術文庫

服部千春『孫子聖典』

株式会社けやき出版

岡田武彦『孫子新解』

明徳出版社

水野実『図解雑学 孫子の兵法』

ナツメ社

守屋淳『最強の孫子「戦い」の真髄』

日本実業出版社

相良亨『日本人の心』

東京大学出版会

金谷治『新訂 孫子』

岩波文庫

家村和幸『闕戦経―武士道精神の原点を読み解く―』

並木書房

二〇〇四年一月一日

二〇〇九年七月二〇日

二〇一〇年七月五日

二〇一一年一月二五日

西森博之『今日から俺は！』

株式会社小学館

一九九〇年～一九九七年

いがらしみきお『映画ぼのぼの』『ぼのぼの』

映画製作実行委員会

一九九三年一月二三日

Mojikyo Institute『今昔文字鏡』

<http://www.mojikyo.org/>

一九九八年

西森博之『道士郎(じゅうろう)』

株式会社小学館

二〇〇四年～二〇〇六年

受 贈 雑 誌 (十)

論究日本文学

立命館大学日本文学会

論樹

東京都立大学大学院人文科学研究

究科国文学研究室論樹の会

和漢語文研究

京都府立大学国中文学会

和洋国文研究

和洋女子大学国文学会

(平成二十五年十二月一日～平成二十六年十一月三十日)